

モンゴル訪問記 2025 年 4 月 22 日

森田 祐和

寒暖差が激しいモンゴルを初訪問しました。当会としては、モンゴルに車椅子を送るのは3度目となりますが、当会単独では初めてです。車椅子はコンテナで107台でした。さらに、飛行機で3台を持参しましたので、合計110台をお届けしました。

受け手はUPC（ユニバーサル・プログレス・センター）で、代表は元首相補佐官でもあったバイヤール氏です。また、仲介者として、当会に15年前から参加し、この度モンゴルに派遣が決まったJICAの生地氏が担当してくださいました。

【贈呈式】

贈呈式は、モンゴル政府障がい者開発庁8階の会場で行われました。日本からは、私と東京昭島中央ロータリークラブ田畑会長、国際奉仕委員長志賀氏が出席してくださいました。さらには今回の重要な橋渡しで貢献いただいたJICA生地氏も参列しました。国営モンゴル放送も取材にみえました。

モンゴル側からは、UPCバイヤール氏、技術部のボギー氏、障がい児親の会、モンゴルロータリークラブ所属アルンゲル氏と多彩な顔触れでした。

社会福祉庁の役員によれば、継続した贈呈を求めると同時に障がい児童の支援をしていきたいという声明もあり、国を挙げて大歓迎をしてくださったことが印象に残ります。

【家庭訪問】

ウランバートル近郊150キロ先のバツスンベル村を訪ねました。地平線が見えるほどの大平原が続く先に給油所が一軒、そこが村の入り口でした。雪解け水が乾いた泥道を車は蛇行しながら進みます。風が吹き、乾いた土が顔にかかってきます。

○BA君 11歳 男児

家の中で車椅子に乗っていたが、ステップが合わない。ロータリーの志賀氏が持参した工具で調整。タイヤに空気が入っていなかった。バイク店に行き空気を入れるように促したが、できれば空気入れを日本から送ることを伝えた。

○EGさん 10歳 女児

配布をした車椅子が小さすぎて体に合わないため、空輸で持ってきた車いすと交換し、さらに室内で組み立てを行った。一時間後に完成し、彼女を乗せるとすぐに外に出たいと言う。玄関の段差があるので皆で持ち上げて夕日が差し込む庭に車椅子を降ろし、後ろから押してあげると初めて笑った。うれしい気持ちが皆に伝わる一瞬だった。

○IB さん 6 歳 女兒

家の中に入ると母親と思ったら姉の娘だという。左目が色弱、小 1 だが学校には行っておらず家庭教師に教えてもらっているという。背骨に問題を抱えており、15 歳になったら手術をして金属板を入れる予定とのことだった。言葉がわかり、彼女が書いた画集を見せてもらった。

○AK 君 14 歳

健常児として小 5 まで学校に通うが、馬から落ちて昨年 8 月から歩けなくなり、学校でのいじめもあり通学をやめた。父が亡くなり母だけでは学校の送り迎えができない状況にあった。障がい児を抱えて母も仕事ができず、生活が追い込まれていることがわかる。母は夏だけ親戚に子どもを預けて市場で仕事をして生活を支えている。リハビリはしていないという。

○個人通所施設

障がい児の母が個人でアパートを買い、リハビリ施設として活用している。国からは 30 万トゥグルグ/月（12,000 円程度）の支援があり、職員 4 名の編成。ここには、8 台貸与されている。意外にも座位保持装置が人気なのは、主に室内で活用するからと思われる。社会主義時代のロシア製の器具もあったが、快適ではないため納屋に放り込まれていた。15 名が通っている。リハビリ用具、座位保持装置がここでは有効であることが理解できた。

【総 括】

モンゴルでは、車椅子を首都において置き集中管理をしようと組織を立ち上げていました。JICA の生地氏が各方面から人材を集めて一堂に会し、相互確認する場に立ち会いました。UPC センター、バイヤール氏、技術部のポギー氏、障がい児親の会、豪州からモンゴルに 1300 台の車椅子を輸入したアルンゲル氏、日本語堪能な事務局三名、首都に倉庫を無償支援している社長など、態勢作りも万全です。他国ではできない見本をめざして受け入れている姿勢を確認しました。将来が楽しみです。JICA は生地氏の後任者を既に用意する布陣で日本からの第二弾を待っているそうです。

以上